学校だより

令和３年　５月２８日
横浜市立南本宿小学校
校長　西尾　琢郎
Ｎｏ．５４５

「多様性」と「ふつう」の狭間で

校長　西尾　琢郎

令和３年度も早３ヶ月目に入ります。このところ、何を書いても、どうしてもコロナの話に繋がってしまいがちでしたが、今月は少し目線を変えて、学校や教育における「多様性」の大切さについてお伝えしたいと思います。

多様性という言葉が広く使われるようになってから、もう随分経ちますが、いまだにその意味や重要性が十分に知られているとは言えないように感じています。

学校の中での多様性とは何でしょうか。一番分かりやすいところでは、性別や身長体重など、身体的な多様性かもしれません。教科や食べものの好き嫌いなど、嗜好の違いもあるでしょう。一方、最近話題に上ることが多いのは、さまざまな形で外国につながる子どもたちや、発達上さまざまな特性を持った子どもたちの存在、さらには LGBTQ と呼ばれる性的な面での多様性かもしれません。いずれもとても大切で、必ず尊重されなくてはならない多様性の姿です。

しかし、実はもっと大切で普遍的な「多様性」が存在します。それは、子どもたち一人ひとりの「学びのスタイル」です。同じこと、同じものを見聞きしても、人によって受け止め方は異なります。これは比喩的な意味ではなく、本当にそうなのです。ですから当然、あるーつのことを身に付けようとする際にも、その子なりに適した方法は一人ひとり異なってきます。よく言われる「視覚優位」「聴覚優位」などはその際立った例ですが、極端でないまでも、言葉から筋道を立てて学ぶのが適した子、具体物を操りながら思考するのが適した子などなど、同じーつの手立てではなく、それぞれに適した手立てをとることで、より楽しく、より深く学ぶことができるようになるのです。

知能指数（IQ）と呼ばれる知的レベルの物差しがありますが、現在ではひとつの物差しだけで人の能力を量ることには無理があると考えられるようになりました。そうした考えのーつが「MI（マルチプル・インテリジェンス）」です。人には認知や脳のはたらきと密接に関連して「言語的知能」「論理・数学的知能」「空間的知能」「音楽的知能」「身体運動的知能」など、８つの異なる知的能力が備わっており、その各々の力を見取りながら、適した学びのスタイルを見いだすことで、その人の力を最大限に引き出すことができる、という考え方です。

長い間、学校では「多様性」よりも「共通性」や「統一性」が重んじられてきました。もともと多様性に富んだ存在である子どもたちを矯め直し、刈り揃えて、まるで規格品のような「社会で役立つ人材」を生み出すことが求められてきたと言えるのかも知れません。

しかし、時代は変わりました。これからの学校は、子どもたちがそれぞれ違った形で持つ可能性の芽を、できる限り伸ばし育てて行くことを大切にしなくてはなりません。教育の目標は、子どもたち一人ひとりが、幸せな人生を歩むことのできる力を育むことです。

そのためには、子どもたち一人ひとりの違いを前提とし、またそれを尊重しながら、多様な学び方が認められていく必要があるでしょう。スタートしたばかりの GIGA スクール構想も、コンピューターを使ったり、プログラミングを行ったりすることだけが目的なのではなく、それらを通じて、子どもたちが自分なりのやり方で学んでいく術を身に付けることを目指したものです。皆が同じ機材を手にしていても、それをどう活かすかは、一人ひとり違っていていい。そのための１人１台です。そしてまた「かがやきルーム」での特別支援や、個別支援学級での指導も、一つだけの物差しで測った子どもの優劣などとは関係なく、その子に適した場や方法、ペースに寄り添った学びを提供するためのものです。その子を中心に置き、その子の力を最大限引き出すための手立てと捉えていただきたいのです。

私たちには誰もが心のどこかで「ふつう」を良しとする思いを抱きがちです。それは長きに渡る学校教育の生んだ、一つの結果かもしれません。ですがここまで見てきたように、今や「ふつう」というのは、ある種の幻想なのではないかと私は感じています。言い方を変えれば、その人にとっての「ふつう」は、その人だけのものであるとも言えるでしょう。

学校は集団で過ごし、集団で学ぶ場ですから、さまざまなことが「最大公約数」を採って行われるのはやむを得ない面があります。ですがそのことが、一人ひとりの可能性を「最小公倍数」の枠内に、無理矢理閉じ込めるようなものであってはならないと思います。大変難しい取り組みですが、私たちはそのための工夫を、あきらめずに重ねていきたいと考えています。どうか皆さまのご理解とご協力を、よろしくお願いいたします。